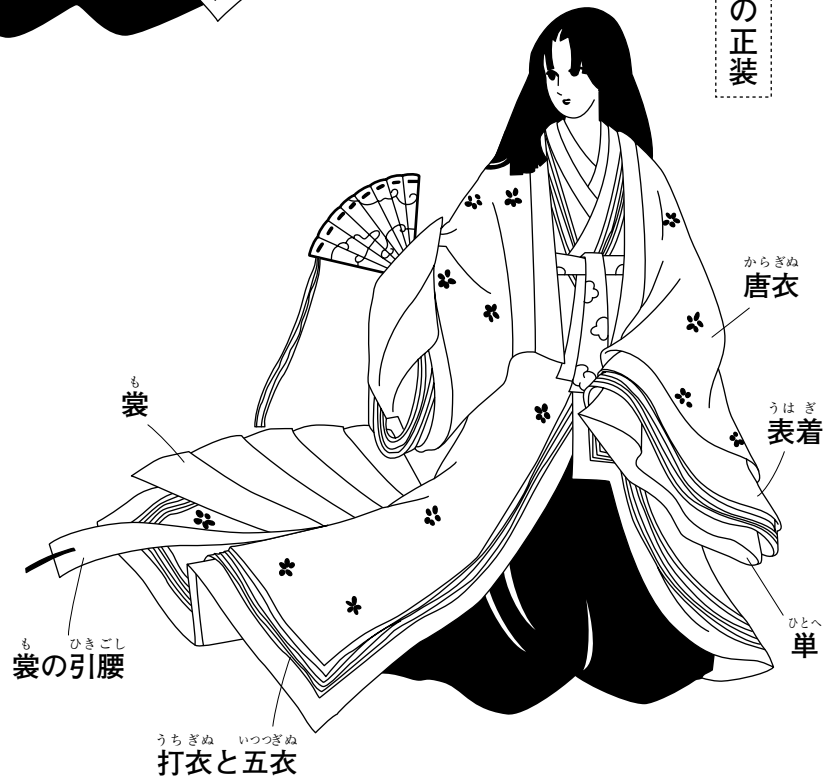


女性の普段着



女房の正装



一、後宮の争い 『源氏物語』〈桐壺〉

いづれの御時にか、

女御、更衣あまたさぶらひ給ひける中に、

いとやんごとなき際にはあらぬが、

すぐれてときめき給ふありけり。

はじめよりわれはと思ひ上がり給へる御方々、

めざましきものにおとしめそねみ給ふ。

〔中略梗概〕

他の更衣たちは、帝のこの更衣への寵愛ぶりに心穏やかではなかった。

宮仕えにつけて人からの恨みを負ったせいなのか、更衣は病気がちとなり実家に戻ることが多くなった。

帝はますます更衣のことを不憫にお思いになり、上達部たちが目をそむけたりなどするほどの、寵愛ぶりを見せた。

更衣は宮中できまりの悪いことが多くあったけれど、帝の寵愛を唯一の頼みとしていた。

【解釈例】

いつの帝のご治世の時であったでしょうか、

女御・更衣が多くお仕え申し上げなさっている中に、

たいして高貴な家柄ではない人で、

目立って（帝に）寵愛されなさっている人（更衣）がいた。

（宮仕えの）最初から自分こそが（帝の寵愛を一身に受けているのだ）と誇りを持っていらっしやるお方々は、

（その更衣のことを）目障りな人だと見下し嫉妬なさる。

前の世にも御契りや深かりけむ、

世になくきよらなる玉のをのこ御子さへ生まれ給ひぬ。

前世でもご宿縁が深かったのだろうか、

（御寵愛されるだけでなく）実に美しい玉のような皇子までお生まれになった。